

チンパンジーの飼育管理

渡邊 祥平

霊長類研究所 人類進化モデル研究センター

1. はじめに

本研究所では、現在14頭のチンパンジーを飼育している。

チンパンジーは、ヒトと最も近い種であり、絶滅危惧種であり、特に動物福祉に配慮が必要である。今後の大きな課題として、種の保存、飼育下における福祉の向上、非侵襲的な研究利用などが挙げられる。

今回は、健康管理、施設管理、個体のトレーニング、社会的環境のための群れ作り、またこれまでに行った環境エンリッチメントに関する実務について紹介する。

2. 健康管理

チンパンジーの寿命は、40～50年といわれており、健康を維持することは重要になってくる。本研究所で最高齢のレイコもすでに推定43歳である。

健康における基本的なこととしては、毎日の睡眠や食事の摂取、また精神的な面においても十分配慮することが必要である。重要なことは、各個体の日々の観察にあり、小さな変化などに気を配ることにある。

怪我の際には、傷口の消毒や投薬を行う。また体温測定や体重測定を行っている。特に体調が悪い際には、採血や麻酔を行い対応している。

3. 施設管理

居室9つ、それにつながる屋内サンルーフが2つ、624㎡の屋外放飼場（図1）で飼育している。屋外放飼場は、高さ15mのタワーが3本、そのタワーに多数の鉄骨、丸太、ロープを取り付けており、飼育環境の複雑さを作っている。

施設管理は、逃亡のおそれがないように管理するのは当然だが、放飼場など施設内の丸太や樹木などの管理、居室内の清掃、居室の寒暖の調整などを日常行っている。



図1-屋外放飼場の全景

4. 個体トレーニング

チンパンジーは、鋭い犬歯があり、腕力も強く、握力は約300キロあるといわれ、猛獣として扱われるために接するには注意が必要である。そのため日々彼らと良い関係を築き接することが非常に大事である。

そうすることによって、薬を疑うことなく投薬することや怪我をした際には簡単な治療であれば行うことができ、非常に有効である。

さらにはチンパンジー1頭1頭の健康状態や心理状態を把握することに加え深い信頼関係により、飼育員がチンパンジーと同室することやチンパンジーの腕に直接注射や採血することも可能になっている。

5. 環境エンリッチメント

環境エンリッチメントとは、「動物福祉という理念のもとに、心理学的幸福を実現するためにおこなう、飼育環境を豊かにする試みである。自然に近い環境を理想とし、物理的環境や心理的状況など様々な角度から行われる。本研究所

でも様々な取り組みがあるが、その中で以下のような環境エンリッチメントを行っている。

野生のチンパンジーは、オトナ・コドモ、オス・メスが 20～100 頭の群れを構成し、1 日を共に社会を営んでいる。本研究所でも、そのような社会性を持った群れを構成できるように、どの個体も単独にならないよう、また 1 日を通して、共に生活させている。

野生のチンパンジーは、果実、葉、植物など非常に多彩な食物レパートリを持っている。そして、日中の半分以上の時間を採食行動に費やしている。そのため、多くの野菜や果物を与えるようにしていることや、年 1 度に屋内サンルームに植樹を行っている。また最近の取り組みとして、牧草を食後に与え始めた。

6. 群れ作り

本研究所は、アキラを主体とする群れとゴンを主体とする群れの 2 群を構成している。将来的には、1 群にする事を可能にしていきたいと考えている。その目的としては、より自然に近い状況を作るためである。

チンパンジーの群れは、小集団が合流したり分裂したりする離合集散をくり返す複雄複雌の父系集団である。オスはオトナになっても生まれた群れにとどまり、メスは 9～11 歳になると生まれた群れを出て別の群れに移る。また、個体間には順位差があり、オスは特にその順位争いがあることが知られ、野生下・飼育下共にオス間での合従連衡が見られる。

以上を念頭に置き、彼らの関係の観察、馴致や同居を踏まえ、群れ編成を考えていく必要がある。

日頃群れの状況観察から各群れにいるメス同士やオスとメスの馴致を行い、新たな群れの編成や 1 群化への準備を行っている。その中で最も困難と考えられることは、オス同士の同居である。何度か格子越しの馴致を行った後に、1 度同居を試みたものの、激しい闘争となり中断せざるを得ない状況になった。

このオスとオスの同居は他のチンパンジーを飼育している国内外の施設でも問題となっているが、チンパンジーサンクチュアリ宇土やオランダ AAP の Michael Seres 氏もオス同士の同居を実践されており、それからは視覚的接触や、学習環境の整備によって大人でも社会性を身につけられることや、状況作りがポイントとなっていることがわかっている。今後検討し、群作りに活かしていきたい。

7. 今後の展望

他施設との情報交換を行いながら、彼らの飼育環境をより自然に近い環境に近づけていけるよう努めていくつもりである。



図 2—グルーミングをするアキラたち
左からアキラ、アイ、アユム



図 3—消防ホースで作製したハンモックに乗るプチ